様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ２５ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ００６８０

研究課題名（和文）英語の文法的逸脱表現の創発と受容における創造的調整機能の研究

研究課題名（英文）A Study of Accommodation Process in Emergence and Acceptance of Grammatical Deviations in English

研究代表者
鈴木　亨（Suzuki, Toru）

山形大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：７０２１６４１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：　標準的な英文法からすると逸脱的とされる創造的表現について、コーパス調査や文体論、歴史的研究を参照した分析を行った。主な研究成果として、（１）活動動詞と形容詞という一見逸脱的な組み合わせが、関連表現の複合的なネットワークに位置づけられて認可され、多層的意味解釈が生じるしくみと、（２）thinkの疑似他動詞用法が、前置詞脱落による自他交替において、有標性に基づき自動フレームから他動フレームの解釈が否定的に導かれるしくみを明らかにした。コーパス調査に基づき、疑似他動詞用法は、特定のジャンルや場面に対応した独自の談話・語用論的機能を担い、慣習的な表現として確立しつつあることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　一般的には文法逸脱とみなされる事例の創発と受容のしくみの研究を通じて、その背後には相互に位置づけられる関連表現のネットワークがあり、それぞれの表現は特定のジャンルや場面に対応した独自の解釈や談話・語用論的機能を担い、慣習的な表現として一定の拡がりを見せて定着しつつあることがわかった。インターネットの普及による多様なスタイルの可視化とメディアの拡張、そしてインターネット・コーパスの発達は、逸脱的な表現が可視化される契機になるとともに、フォーマルなテクストに依存するところの多い従来の文法記述を、言語使用に関わる側面を包摂したより多面的な文法モデルとして再構築する必要性を示唆している。

研究成果の概要（英文）：The emergence and reception of innovative expressions, which are often regarded as deviant from standard English grammar, were analyzed from multiple perspectives, referring to corpus studies, stylistics, and historical research. The results of the study include: (1) seemingly deviant combinations of activity verbs and adjectives are analyzed in a complex network of related expressions, resulting in multilayered semantic interpretation, and (2) the pseudo-transitive use of the verb "think" is paired with its intransitive counterpart as a marked option with the omission of the preposition "of/about", where the interpretation of the transitive frame is negatively derived from the intransitive frame. Based on the survey of COCA, it was also shown that the pseudo-transitive usage is in the process of being established as a network of mutually related expressions, each carrying its own discourse and pragmatic functions for specific genres and situations.

研究分野：英語学

キーワード：文法　逸脱表現　意味解釈　言語使用

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

大規模コーパスを活用した言語の使用実態の詳細な観察に基づく研究では、規範的・標準的な文法記述には収まらない英語の変則的事例の存在が数多く指摘され、従来の均質的な文法観、すなわち一般的規則体系からなる言語知識は過度に理想化された姿であり、様々な変則的事例を含む言語使用の実態をどう捉えるべきかという課題がある。変則的事例は周辺領域だけではなく、言語全体に拡がりを持つが、逸脱は無秩序に生起するわけでもない。可塑的システムとしての言語は、新たな変化に開かれつつ、逸脱を調整するしくみを備えており、そこに文法の規範性を見ることもできる。逸脱表現の創発と受容のプロセスを内在化した言語システムは、言語使用においてどのような調整機能を果たすのか、とりわけ逸脱表現が言語知識の体系に取り込まれるしくみの解明を目指す。

２．研究の目的

本研究は、標準的な語法・文法からすると逸脱的とされる創造的表現が、一定の言語的環境条件の下で、創発し、受容されていくしくみの解明を通じて、言語知識における規範と創造の関係性を再検討することを目的とする。言語使用における変則的事例の多面的分析を通じて、逸脱が容認されるために必要な調整のしくみを明らかにし、創造的逸脱を包摂した言語知識のモデル化を行う。

３．研究の方法

文体論的視点を取り入れ、形式性の度合いなどデータの質的特性に配慮しつつ、多様なジャンルを含むテキスト（ジャーナリズム、広告、会話文、フィクション等）を分析対象とし、新奇な個別事例を収集する。補完的に、大規模コーパスを利用して語彙と構文パターンの共時的・歴史的調査を実施する。

複数の逸脱的表現の構文パターンを対象とし、言語使用のインターフェイスにおける複合的な言語環境の制約の下で、調整と組み換えが生じる動的プロセスとして分析する。逸脱的表現の構文分析を統合的に捉え直し、逸脱表現の受容に共通する文法の調整システムのモデル化を進める。理論的には、「語法（慣用的語彙文脈情報）の集積とそのブリコラージュ（寄せ集め）的活用」を重視するメンタル・コーパス的言語観（Taylor 2012）を参考にする。逸脱表現は、高度に文脈に依存した臨時的な言語素材の組み合わせに発し、言語使用において関連する語彙・用法のネットワークが複合的に参照され、受容に向けて調整がなされる動的なしくみを構想する。

４．研究成果

標準的な英語の語法・文法からすると逸脱的とされる創造的表現の創発・受容のしくみの分析を通じて、言語知識の規範性と創造性について再検討を進めた。従来の文法研究の分析手法に加え、文体論やコーパス研究、歴史的考察等を参照した多面的分析の視点を重視する研究を行なった。

４．１　初年度は、事例分析として、２本の論文「活動動詞を含む属性評価分文の拡張と両義的解釈」（単著、2019 年刊行）、「創造的逸脱を支えるしくみ－Think different の多層的意味解釈と参照のネットワーク」（単著、2019 年刊行）をまとめた。

前者では、活動動詞と形容詞という一見逸脱的な組み合わせ表現が、一定の語彙文法的・文体論的制約の下で拡張しつつあることを指摘し、それに伴う多義的意味解釈のしくみについて理論的に考察した。具体的には混交（blending）のメカニズムにより、行為者の活動を描写する文形式と行為者に関する属性評価文が組み合わされ、両義的な解釈が生じることを示した。

後者では、“Think different”に代表される創造的逸脱と見なされる表現が、関連表現から複合的に構成される話者の言語知識のネットワークの中に位置づけられ、多層的解釈を伴い受容・認可される可能性について考察した。創造的逸脱表現は無秩序に生まれるわけではなく、その背景に「逸脱」を支え、適切な解釈を導く複数の関連表現の緩やかな拡がりを想定する言語モデルを提示した。

いずれも従来ほとんど理論的な文法研究の対象とはなっていないが、確実に英語コミュニティに存在し、拡張しつつある表現についての実証的な研究であり、現代英語の変化する姿を言語学的に理解する上で有意義なものであり、創造的逸脱表現の創発と受容という言語使用の側面を包摂した文法のモデル化に向けての重要な検討素材となる。

４．２　次年度は、英語の動詞 think の擬似他動詞用法について考察をまとめた（論文「動詞 think の自他交替について－前置詞脱落の意味論」（単著、2022 年刊行）。基本的に自動詞である think は，思考対象を指す名詞句は前置詞を伴うのが通例だが、カジュアルな使用域では，直接目的語をとる think の疑似他動詞用法というべきものがある。本研究では、擬似他動詞用法の文法的な成り立ちについて，前置詞脱落による自他交替における他動フレームの有標性を元に、構

文的意味が自動フレームから否定的に導かれるという分析を提示した。有標の他動フレームにおいて否定的に導出される「直接関与」の解釈を中核とし、命令文や進行形での使用、無冠詞名詞といった局所的な表現上の選択から、使用場面に応じた具体的な解釈が付与されることになる。

４．３　最終年度は、think の疑似他動詞用法について，自動詞用法との関係を異構文として位置づける異構文分析の枠組みで，現代アメリカ英語の話しことばやカジュアルな書きことばを含む汎用コーパス COCA の調査に基づき，関連表現を含めた使用実態の拡がりについて考察した（論文「動詞 think の疑似他動詞用法の拡がり－談話・語用論的機能からの考察」(単著、投稿済、2022 年刊行予定)）。一部の表現が慣習的なよくある言い回しとして一定の定着度を示す一方，いくつかの関連表現が，それぞれ独自の解釈や談話・語用論的機能を担いつつ，[(I) think NP] という形式をスキーマとして間接的・累積的に強化するようなネットワーク的な言語環境を構成している可能性について論じた。

４．４　標準的な語法・文法の体系からすると文法的逸脱とみなされる事例の創発と受容のしくみの研究を通じて、その背後には当該表現の適切な解釈を導き、その使用を支える、相互に緩やかに結びついた関連表現のネットワークがあり、またそれぞれの表現は特定のジャンルや場面に対応した独自の解釈や談話・語用論的機能を担いつつ、多かれ少なかれ慣習的な表現として一定の拡がりを見せて定着しつつあることがわかった。このような言語モデルは、従来の規則の体系を基盤とする静的な文法モデルとは異なり、時代とともに柔軟に多様な変化を示しつつある言語の動的な姿をより正確に捉えることができると考えられる。

インターネットの普及による多様なスタイルの可視化とメディアの拡張、そして大規模コーパスの発達は、逸脱的な表現が可視化される契機になるとともに、フォーマルなテクストに依存するところの多かった従来の文法記述を、言語使用に関わる談話・語用論的側面を包摂した多面的な文法モデルとして再構築する必要性を示していると思われる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 鈴木亨	４．巻 0
２．論文標題 活動動詞を含む属性評価文の拡張と両義的解釈	５．発行年 2019年
３．雑誌名 森雄一・西村義樹・長谷川明香（編）『認知言語学を紡ぐ』（開拓社）	６．最初と最後の頁 188-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鈴木亨	４．巻 0
２．論文標題 創造的逸脱を支えるしくみ－Think differentの多層的意味解釈と参照のネットワーク	５．発行年 2019年
３．雑誌名 森雄一・西村義樹・長谷川明香（編）『認知言語学を紡ぐ』（くろしお出版）	６．最初と最後の頁 47-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鈴木亨	４．巻 0
２．論文標題 動詞thinkの自他交替について－前置詞脱落の意味論	５．発行年 2022年
３．雑誌名 島悦郎・富澤直人・小川芳樹・土橋善仁・佐藤陽介・ルプシャ・コルネリア（編）『ことばの諸相－現在と未来をつなぐ』（開拓社）	６．最初と最後の頁 272-282
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 鈴木亨
２．発表標題 属性評価文の拡張用法ー活動動詞と形容詞の臨時的組み合わせ
３．学会等名 言語変化・変異研究ユニット 第６回ワークショップ
４．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

１．著者名 住吉誠・鈴木亨・西村義樹（編著）	４．発行年 2019年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 249
３．書名 慣用表現・変則的表現から見える英語の姿	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関